

玄海プルサーマル裁判ニュース

No.12
発行日：2014.3.1



発行者：玄海原発プルサーマル裁判を支える会 会長 澤山保太郎
編集者：玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会 代表 石丸初美
〒 840-0844 佐賀市伊勢町 2-14
TEL：0952-37-9212 FAX：0952-37-9213

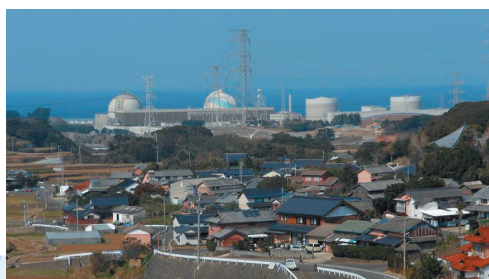
E-mail：saiban.jimukyoku@gmail.com
U R L：http://saga-genkai.jimdo.com/
Facebook：http://www.facebook.com/genkai.genpatsu
Twitter：@sagakarakaeru

ただいま
進行中!→

被告：
九州電力
被告：国

玄海原発 3 号機プルサーマル運転差止裁判
玄海 2・3 号機再稼働差止仮処分 玄海 1～4 号機運転差止裁判
玄海 3・4 号機運転停止命令義務付請求裁判

1月24日玄海原発行政訴訟初公判! MOX裁判9月結審へ



↑生活の場と隣りあわせの玄海原発
(右から1〜4号機)

↑行政訴訟初公判 佐賀地方裁判所入廷

2月16日、佐賀県庁を人間の鎖で包囲 (さようなら原発九州総決起集会) →

普通の生活を守りたい、ただそれだけ

玄海原発 3・4 号機運転停止請求事件 (被告：国) 第 1 回公判における石丸初美の意見陳述

私は石丸初美と申します。62 歳です。

東京電力福島第一原発事故から 3 年が経とうとしていますが、今日も日本は「原子力緊急事態宣言発令中」なのです。被曝の脅威にさらされながらの収束作業と、放射能汚染水の流出は今も続き、15 万人を超える避難生活者のいる現実を無視して、政府・電力事業者は再稼働へ向けた動きを加速させています。この国の政治は福島を見捨てるつもりでしょうか。国民の命を第一にしないのでしょうか。私達はこのことが許せず、原発政策の本丸である国を訴えることにしました。

私は 2006 年 2 月、古川佐賀県知事が「プルサーマル安全宣言」を発表するそのときまで、日本は四季に

恵まれ安全な国だと、何も心配せず暮らしてきましたが、勉強会で原発の怖さを初めて知り、天と地がひっくり返るくらい愕然としました。

私達はプルサーマル計画の是非を問うべく県民投票条例制定を求める署名活動を行いました。佐賀県議会は 49,609 筆の県民の声をあっけなく否決。2009 年 12 月 2 日、とうとう玄海 3 号機で日本初のプルサーマル商業運転が開始され



No.12 CONTENTS

■意見陳述	石丸初美……1
■公判報告	永野浩二……3
■プルサーマルの「復習」	豊島耕一……9
■弁護団紹介	……6
■法廷外の活動報告	永野浩二……7
■第 1 回「2 プル座談会」	荒川謙一……10

■『12・2 反プルサーマルの日 みんなで歩く玄海町』に参加して	……11
■伊方と川内へ～集會に参加し、 原発を見てきました	塩山正孝……13
■2013 年度決算報告書	……14
■原子力防災は廃炉しかない! ■コラム	……15
■お知らせ、編集後記	……16

てしまいました。私達はやむにやまれず、2010年8月9日、九州電力を相手に提訴しました。

2011年3月11日はここ佐賀地裁で第2回口頭弁論の日でした。私達は裁判所を出るや否や、それぞれ大切な家族や友人知人への安否確認の電話を入れました。刻々と情報が入ってくる中、福島第一原発の状況がとても心配でなりません。この日を境に私達は、反原発・脱原発しかないとの思いを強くし、同7月7日「玄海2・3号機再稼働差止仮処分裁判」と同12月27日「玄海1～4号機全基運転差止裁判」を次々に起こしました。

これまで国も電力会社も原発は『『五重の壁』で守られているから安全だ!』と言ってきましたが、3.11で原子炉建屋は吹き飛び、膨大な量の放射性物質が日常生活へ撒き散らされました。国が住民のパニックを恐れ情報隠蔽したことで、住民は無用の被曝を強いられました。原発は危険極まりないもの、ひとたび事故を起こせば筆舌に尽くしがたい甚大な被害を及ぼすものだと、国民の前に正体を曝け出したのです。原発は人体実験です。事故が起きたら「想定外」では済まされません。

3.11当日、政府は法律に基づき「原子力緊急事態宣言」を発令しました。私は座談会などでこの事を人に話す前に必ず規制庁に確認しています。何度かけたことでしょうか。昨日も「解除されていません」が答えでした。そうした中で、安倍首相の「日本の原発は世界一安全」という不条理極まりない暴言に心の底から憤りを感じています。3.11は三度目襲った核の脅威、誤った政治判断の人災です。日本経済のためとの理由で、今度は世界中に核を撒き散らす原発輸出は、罪をも犯す政策です。国民は決して望みません。

国の最優先課題は「被災者救済」「事故の収束と責任追及」です。この度の事故で、苦悩と不安を抱えている全ての被災者と正面から国は向き合うこともせず、経済優先の原発再稼働など言語道断です。

昨年11月18日、佐賀県議会原子力安全対策等特別委員会は原子力規制庁の担当者二人を参考人として招致し、その中で県議からの「規制基準は原発の安全性を保障するのか」との質問に、田口原子力規制庁課長補佐は「安全ですというと、安全神話になるので、そう言わない。リスクが常にゼロにならないというのを基本にしている。絶対安全な状態になるというのは永久にこない」と答えました。さらに、田中俊一原子力規制委員長も「完全な安全は保証しない」と発言しています。言い換えれば、「原発にリスクはあるから安全は保証しないと、再稼働の前からちゃんと説明していましたからね」と、国から国民は一方的に非道な宣告をされたのです。

翌12月13日、県議会に招致された井野博満東大名誉教授は「新規制基準は、まるで、壊れそうな船に救命ボートをたくさんつけているようなもの。玄海原発の過酷事故時には、炉心溶融を防ぐ手段がなく、対策はすべて『付け焼刃』。『完全に安全』に近づける努

力もなしに再稼働は暴挙だ。」と証言しました。国の役割っていったい何でしょうか。国民の命を守ることにじゃないのでしょうか。

3.11前から佐賀県や九州電力は「国が安全と言うから安全だ」と繰り返し、国は「原発事故の責任は事業者です」と言っています。市町村は「県の判断を待つ」という具合で、お互い責任のたらいまわしでしたが、3.11を受けてもなお無責任体制は変わっていません。

私達は地元玄海町の各家庭を一昨年、1年かけて訪問しました。

「とにかく偉い人の言う通りにしかならん」
「原発が安全と言うならなぜ、避難訓練や避難道路の拡張が必要なのか」
「福島の放置された牛の映像を見て、自分も牛を飼っているが、なんとも腹立たいい」
「孫達の将来を考えると、やっぱりないに越したことはなか」
「うちは高台にある。事故が起きたら一直線で放射能が来るからもうおしまい」

これらは玄海町民の生の声です。日頃は近所同士で原発の話はできないそうですが、堂々巡りの胸の内を私達に話してくれます。話をしてくれた人も、してくれなかった人も、原発をすぐそこに見ながら暮らすみなさんが恐さを一番実感しておられると感じました。

事故直後、佐賀に来た福島の人が「佐賀は蛇口の水がそのまま飲めていいですね。佐賀に来て久しぶりに深呼吸をおもいきりしました。日頃からなるべく空気吸わないようにと、していたんです」と言われました。私は、水の大切さ、そして全ての生き物は大自然に守られているのだと、やっと気付かされました。

今、日本中の原発50基全部が止っています。でも国が自ら「絶対安全な状態は永久にこない」と断言する原発が再稼働したら、私たちは不安を抱えながら「どうか原発事故が起きませぬように」と祈るしかないの



意見陳述する石丸初美団長（スケッチ 大江登美子）

でしょうか。福島の人達が、原発事故直後の生々しい事実や故郷を奪われ地域社会が丸ごとなくなるといふ、私達には到底想像もつかない状況を語っています。

重ねて、原発は事故が起きなくても、ウラン採掘から廃炉・核のゴミ処理まで命を削る被曝労働と、核のゴミを未来の人々に遺すことになってしまいました。

私達が訴えているのは、特別な問題ではありません。人間として生まれ、大自然の営みに囲まれて成長し、子どもを生み育て、日々の暮らしを繰り返し、初詣には「どうか家族元気で過ごせますように」と、普通の生活を守るための訴えです。ただそれだけです。未来

の人達にも動物や植物と共存しながら、生まれてきてよかったと思える普通の生活を送ってもらいたいのです。今を生きる大人の責務としてこの国の不条理を正し、私たち自身が再び原発事故の加害者とならないよう裁判に訴えました。政府は国民の声をまっすぐ受け止め、原発再稼働を止め、「脱原発」そして廃炉へと政治判断をされることを心から願います。

裁判長におかれましては、市民の良識を抛り所にしてご判断くださるようお願い申し上げます。

今日は貴重な場をいただきまして、ありがとうございました。

1月24日公判報告

裁判の会副事務局長 永野 浩二

1月24日(金)、佐賀地裁において、全国36都道府県と韓国から384名の原告団となった行政訴訟初公判など、4つの裁判の的行われしました。

佐賀、福岡のみならず、大分、長崎、熊本、高知からも仲間が傍聴に駆けつけてくれました。

裁判所前のアピールでは、新旧様々な横断幕とともに、全国各地の仲間から寄せられた応援メッセージもボードにして掲げました。みなさんとのつながりの中で、私達はここまで歩いてこれました。ありがとうございます！

※メッセージをHPで公開しています。↓

<http://saga-genkai.jimdo.com/2014/01/23/> 応援メッセージありがとうございます！

●行政訴訟初公判

まずは、原発政策の本丸、国・原子力規制委員会に対して玄海原発の運転停止命令を出せと訴える行政訴訟の第1回口頭弁論。

11月13日に提訴した訴状のポイントは主に2つ。「重大事故時に放射性物質の放出を防ぐ措置がまったく不十分であること」「基準地震動の設定が過小評価であり、機器・施設の耐震安全性がまったく成り立たないこと」。

冠木弁護士は、基準地震動評価の問題について、土木学会でも用いられている武村式では現行方式の4.7倍に

なることを指摘したうえで、「地震は一番でかいものを想定しなければならないのに、規制委員会で無視されようとしている。また、まだ審査が終わっていないのに、規制委員が『夏までに稼働できる』などと言うのはおかしい話。これらに大きな危惧をもって、今回提訴としたところである」とピシャリと指摘しました。

被告・国は、1月10日付の答弁書で「原告の請求を棄却することを求める」とだけ回答してきました。福岡法務局訟務部の職員ら9人が被告席に着き、「訴状はたくさん専門的内容があるので、反論する準備書面は3か月後ぐらいにしてほしい」と述べました。提訴からすでに2か月経って、さらに3か月後に反論してくるとは、時間稼ぎとしか思えません。

そして、石丸初美・原告団長が意見陳述に立ちました。

「普通の生活を守るため、ただそれだけです」——玄海プルサーマルの動きが始まってから8年間、地べたを這うように行動して感じてきた思いを、法廷でまっすぐに訴えました。

●第7回玄海「全基運転停止」公判、第11回玄海2・3号機「仮処分」審尋

次に行われた、九州電力を被告とする全基裁判、仮処分審尋では、1号機の脆性劣化、2号機の配管損傷などを具体的危険性として取り上げています。また、3,4号機については行政訴訟でも指摘したのと同じ内容が、こちらの裁判でも生かされることとなります。今後、証人として専門家が呼ばれることもありえますが、玄海原発1～4号機すべてに具体的危険性があることを、私達はしっかりと訴えていきます。

●3号機プルサーマルMOX裁判第2回弁論準備手続

最後に、九電を被告とする「玄海3号機MOX裁判」の第2回「弁論準備手続」(非公開)が2時間半、行われました。11月13日に開かれた前回同様、九電側は技術社員が、原告側は裁判補佐人の小山英之さんが



公判前のアピール (佐賀地裁前)

パワーポイントで説明をする小山英之特別補佐人（右端）。真中は谷弁護士、左端は九電の技術社員。



パワーポイントで説明した後、質疑となりました。

裁判官は三菱重工製の MOX 燃料のデータについて、「安全だ」という根拠や具体的な数値について、かなり突っ込んだ質問をし、九電はこれまで秘密にしていたものを、ようやく少しだけ出してきました。しかし、このデータについて、九電は「閲覧制限」の申し立てを行い、情報公開に制限をかけたのです。

原告は被告九電が出してきたグラフを物差しで測って数値を読み取り、ウランペレットと MOX ペレットという 2 つの統計的集団の差違を一種の平均値で比較しています。それを基に MOX 燃料の「ギャップ再開」(=燃料棒溶融が始まる)の危険性を指摘しているのです。

ところが、被告はこのような統計的な性格を完全に無視して「統計的ではなく確定的でないだめだ」と主張しているのです。このような観点では、被告自身が出してきた「図 3-3 (2)」のデータなど完全に無意味になってしまいます。ところが他方では、そのデータ自体の存在は認めているため、その矛盾を裁判所から突かれているわけです。

第 3 回「弁論準備」が 3 月 13 日に開かれた後、7 月 18 日に公開の場で「証人尋問」が 5 時間かけて行われ、9 月 19 日に結審するという日程が確定しました。7 月 18 日がヤマ場になりそうです。ぜひとも傍聴におこしてください！（詳細日程は 16 ページをご覧ください）

核燃料サイクルのつなぎとしての危険なプルサーマルは、佐賀の地で、日本で最初に始められてしまいました。私達は、やむにやまれず裁判を始めざるをえませんでした。

原発裁判で今回のように非公開ながら、科学的に突っ込んだやりとりがなされるのは、勝訴した「もんじゅ」裁判以来だそうです。3.11 を経験した私達は、再稼働を阻止し、脱原発社会をつくるため、法廷外の運動としっかり結びつけながら、この裁判でなんとしても勝利しなければなりません。引き続きのご注目とご支援をよろしくお願いいたします。

プルサーマルの「復習」

今さらと思われるかも知れませんが、原発そのものの廃止を求める訴えも加わったとは言えプルサーマルはこの裁判の原点であり、筆者も含め「学んで時に之を習う」ことも必要でしょう。また、政府も原子力ムラも、原発再稼働だけでなくこのプルサーマルや核燃料サイクルもあきらめていませんので、今も重要課題であり続けています。そこで、基本的な重要事項について復習してみることになります。

●プルサーマルとは

プルサーマルという言葉は和製英語で、pluthermal でググっても日本のウェブサイトしか出て来ません。プルトニウムの「プル」と、熱中性子炉の英語「サーマル・リアクター」の「サーマル」をくっつけたものです。つまりプルトニウム燃料を（高速中性子炉でなく）ふつうの原子炉で燃やす（核分裂で熱を取り出す）ということです。国際的には、使われる燃料が MOX (mixed oxide — 混合酸化物) と呼ばれることから、この言葉が使われます。

●なぜプルサーマルなのか

プルトニウムはもともと自然界にはなく原子炉でのみ作られますが、本来その目的は高速増殖炉と言われる原子炉で利用するためでした。高速増殖炉では、天然ウランの 99.3% を占める、燃えない、つまり核分裂しないウラン 238 を、効率よくプルトニウムに変えることが出来るので、「夢の原子炉」と言われました。ふつう

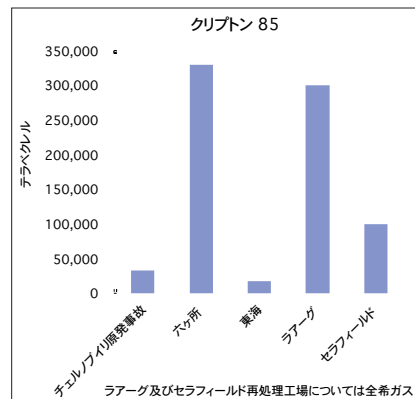
裁判の会科学技術顧問／佐賀大学名誉教授 豊島 耕一

の原子炉ではわずか 0.7% のウラン 235 だけしか利用できないのです。ところが、この本命の高速増殖炉の原型炉「もんじゅ」は 1995 年のナトリウム漏れ事故以来、わずかな期間を除いて今なお停止したままです。

このような本命の路線のつまずきを糊塗し、また溜まりすぎたプルトニウムを減らすため、通常の原子炉で使おうということになったのです。歴史的にはプルトニウムはもともと原爆の材料として作られたもので、現在もそうです。したがってプルトニウムを溜め込むことは核兵器の開発につながり、国際社会の懸念的となります。

●「リサイクル」の嘘

しかし、政府の当初のプルサーマル計画が順調に進んだとしても、プルトニウムの消費量は少な過ぎて帳



1年間に放出する予定の
クリプトン 85

戻は合いません。さらに 3.11 以後の原発停止でプルサーマルも止まっているため、今年 1 月には米シンクタンク「核脅威削減評議会」が日本のプルトニウム保有量の増加に懸念を表明したとの報道もありました。

資源節約、つまり推進側が言うところの「リサイクル」の効果はわずかで、せいぜいウラン資源の 1 割程度の節約になるだけです。それに比べてデメリットは次のように様々な面にわたり、大きなものがあります。

●デメリットだらけ

①燃料製造段階で大量の放射能を環境に放出する。プルトニウムは使用済み燃料の再処理で取り出されるが、そのために燃料を切り刻み、酸に溶かしたりするので、放射能をすべて閉じ込めることは出来ない。

②使用済み MOX 燃料の放射能がウラン燃料の場合より放射能が強く、半減期の長いものを多く含む。

③原子炉はウラン燃料用に設計されているので、安全性が低下する要因がいくつもある。

①に関しては、六ヶ所事業所の「再処理事業指定申請書」を見れば明らかです。そこに環境に 1 年間に放出する予定の放射エネルギーが書いてあります。

例えばクリプトン 85 という希ガスは年間 3.3×10^5 の 5 乗テラベクレル (330 ペタベクレル、33 京ベクレル) で、これはチェルノブイリ事故で放出された量のなんと 10 倍にも当たります (図参照)。

トリチウムに関しては 18,000 テラベクレル (18 ペタベクレル、1.8 京ベクレル) ですが、通常運転時に国内原発で最も大量にこれを放出する玄海原発と比べてみましょう。玄海原発の過去 10 年間の放出量は 824 テラベクレルなので、実にその 20 倍強をわずか 1 年で放出することになります。全国の原発から使用済み

燃料を集めて粉々にするわけですから当たり前と言えども当たり前です。さいわい六ヶ所事業所はほとんど稼働していないので、これらの放射能は使用済み燃料棒の中に眠ったままです。

②の理由はこういうことです。原子炉の中では中性子が飛び交っていますが、これがウランやプルトニウムにくっついて「超ウラン元素」と呼ばれる、より重い元素が出来ます (元素の名前の後に付く数字、例えばウラン 235 の “235” が原子の重さを表します)。

そしてこれが何万年という長い半減期を持つ放射能の正体です。ウランより重いプルトニウムから出発すると、当然ウランから始めるよりも一層重い元素がたくさん出来ることとなります。つまり、よりたくさん「超ウラン元素」が作られるのです。そしてこれは放射線の内部被ばくで最も深刻なアルファ線を出します。

③は、この裁判の焦点でもある燃料被覆管の「ギャップ再開」も、この危険要素の重要な一つです。そしてこれは②とも関係があります。

つまり、アルファ線を出す放射能が多く作られると、アルファ線はいずれ止まってヘリウム原子に、つまりヘリウムガスになります。これが燃料棒の内圧を上げる原因になるのです。内圧が上がれば燃料ペレットと被覆管の間にすきま (ギャップ) ができて燃料自体に熱がたまり、溶け落ちる (メルトダウン) 危険が出てくるのです。

このように、百害あって一利なし、厳密には「一利未満」と言うべきかも知れませんが、とにかく危険な原発を一層危険にし、後の世代への負担をより深刻なものにするプルサーマルと再処理には、原発以上に存在理由がありません。

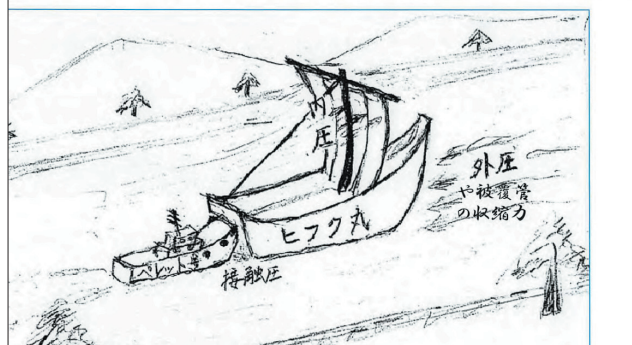
“ギャップ再開” 裁判の中でイラストで説明!

MOX 裁判の最大の焦点である “ギャップ再開” を、裁判補佐人の小山さんは、裁判の中で自筆のイラストで例え話にして説明をされました。

『四万十川を帆掛け船 (被覆管相当) がさかのぼるとき、川の流れによる押し戻す力 (外力や被覆管の収縮力) に逆らって進むために後ろから押す力が必要である。いまは、風の力 (内圧相当) だけでなく、タグボートによる直接的な力 (ペレット膨脹による接触圧相当) が働いているとする。

風力が次第に強まると、やがて風力だけによる帆掛け船の船足がタグボートの速度を超えるときがきて、そこで帆掛け船はタグボートから離れ、その瞬間にタグボートから受ける力はゼロとなる。また、タグボートなしで風力だけによる帆掛け船の走行を考えるとできて、そのときの速度がタグボートの想定速度を上回るまでになったとき、両者は想定上で離れると判断することができる。』

■内圧が同じなら、
ペレットの膨脹速度が低い方がギャップ再開が起こる



そして、ペレット直径の増加速度が、ウラン燃料より小さい MOX 燃料の方が早くギャップ再開が起こることを指摘しました。

MOX 裁判では、こんなふう
に具体的な危険性を科学的に突いて論争しています。



弁護団のみなさん、いつもありがとうございます!

私達の裁判は、公判のたびに毎回、はるばる大阪から佐賀までお来しいだいでいる冠木克彦弁護士、武村二三夫弁護士、大橋さゆり弁護士、谷次郎弁護士の4人の弁護団、そして、裁判特別補佐人の小山英之さん(美浜の会代表)という最強チームのご尽力があったからこそ、ここまで闘ってこれました。

私達市民と同じ志を持って、法廷を舞台に闘ってくださっている弁護団のみなさんに、自己紹介をお願いしました。

弁護団の先生方、いつも本当にありがとうございます!(小山英之さんのご紹介は次号です。お楽しみに!)

かぶき

冠木 克彦 弁護士



平和の問題にずうーっと取り組んできました。弁護士になったのも自由に発言できるからです。自衛隊掃海艇派遣、カンボジア派遣違憲訴訟、日の丸君が代強制に反対し、今は大阪市の不当労働行為に対する訴訟などで大忙しです。変わり種では「脳死」臓器移植に反対し強制連行の救済につとめています。家族は20歳下の「若?」妻と健常の娘と知的障害の

息子がいます。18歳になりますが「天使のごとき君」で「パパパジョ」「パパパジョ」と大好きなパパから離れようとしません。日本ダウン症協会会員です。原発訴訟は93年高浜2号99年ブルサーマル以来ずーと小山さんと武村先生の力でやれてくれました。皆さん方これからも廃炉に至るまでずーととお付き合いください。

武村 二三夫 弁護士



1975年弁護士登録63才です。70年安保の時代に学生生活を過ごし、労働事件や公害事件をやりたくて弁護士を志望しました。九州のご縁では、現在熊本地裁で松橋再審請求事件に取り組んでいます。事件の種類はなんでもやるようにしていますが、労働事件(組合側)の比重が大きいです。大阪拘置所凍死事件、西成警察署傷害事件、西日本入管センター中国人骨折事件など密室人権侵害で国側の責任を認めさせました。また選挙権の関係では、西成労働者の投票権を認めなかった大阪市に損害賠償請求を命じた2011年11月9日大阪地裁判決、懲役に服した者の投票権を否定する公職選挙法の規定を

憲法違反とした2013年9月27日大阪高裁判決を得ることができました。

刑事事件はあまり多くないのですが、日弁連として取り組んだ1994年高松高裁榎井村再審無罪事件を含め5件の無罪事件を得ています。高浜原発差止訴訟、大腿四頭筋短縮症訴訟などは冠木弁護士と一緒に取り組みました。弁護士会の活動にも参加し、特定秘密保護法反対、さらに集団的自衛権容認反対の取り組みを行っています。

体力の衰えを感じながら、週二回のテニスをしています。最近スピンサーブの威力が増し、速く鋭く落ちるようになったと言われて、意を強くしています。

大橋 さゆり 弁護士



1999年登録、弁護士15年目に入ります。市役所職員を5年間やって、その後に司法試験専念期間があったので、昨年中に五十路に踏み込みましたがキャリアはそんなに長くありません。

本を読むのが好きだったせいか、「正義感」という言葉に弱く、自分は正しくありたいし、社会的弱者は救済しないといけないし、女性は男性と平等でないといけないと思って、とにかく大学は法学部を選びました。

大学で、様々な差別問題に触れる機会を得て、自分の「正義」の幅はだいぶ緩く広がりを持つに至りました。その上で、

進路としてはやはり、なれるものなら弁護士が社会の役に立ちそうだと思って、公務員生活との二足のわらじで司法試験勉強を始めました。

しかし司法試験は、論文を書く手が遅い私には難関でした。今でも書面を書くのはスラスラとはいきません。頭の切れもよくないと自覚しています。

でも私の持ち味は、依頼者に寄り添おうとする気持ちだと思っています。忙しくなると持ち味が薄れそうなので、なるべくゆったり、佐賀に来たら佐賀に溶け込みたいと思って通っています。

谷 次郎 弁護士



1972年生まれの41歳。弁護士2年目です。幼少期に父の転勤の関係で鳥栖市に2年ほど住んでいたことがあり、また、私の名前の由来が佐賀県出身の作家・下村湖人の代表作である『次郎物語』とのことで、佐賀には親近感をもっております。妻と3人の子がおります。

大学の法学部に入った1991年から原発反対運動に関わるようになり、同年10月に提訴された高浜原発訴訟（冠木・武村両弁護士が弁護団に参加）の原告になり

ました。裁判での意見陳述でうっかりと「弁護士になる」などと言ってしまったのですが、司法試験の合格に時間がかかり、ようやく40歳で弁護士になりました。

弁護士になった暁には原発訴訟に関わる機会があればと思っておりまして、弁護士1年目から玄海訴訟弁護団に参加させて頂いたのは大変光栄なことです。

皆様の運動に敬意を表しつつ、今後とも微力ながら取り組む所存です。

再稼働阻止へ！一人一人が今できることを！

法廷外の活動報告

永野 浩二

昨年7月に九州電力が規制委員会に玄海3・4号機の新基準適合性審査を申請して以降、九電も、規制委も再稼働へ向けて手続きを急ピッチで進めています。残された時間はあまりありません。みんなが動かなければ原発は止められません！一人一人が今、できることを！この期間の法廷外の動きを、仲間からの報告とあわせて振り返ってみます。

●「完全なる安全対策は玄海を廃炉にすること！」井野博満先生、佐賀県議会招致が実現

佐賀県議会原子力特別委員会は、古川“やらせメール”の追及をいったん棚上げして、安全性についての議論をようやく始めました。

11月18日に招致された原子力規制庁課長補佐は「絶対安全は永久に来ない」と発言、大事故がまた起こりうることを宣告しました。

12月13日、私達が9月に要請していた井野博満・東京大学名誉教授の参考人招致が実現しました。

井野さんは県議全員（自民党が8割）が参加する公的な場で、パワーポイントによる講演と質疑応答を5時間にわたって行いました。

「原発は危険で汚いエネルギー。再稼働は暴挙。技術的に可能な安全対策はすべて実施すべき。完全なる対策は玄海原発を廃炉にすること。技術の立場からは即時原発ゼロ。原発存続の是非は公開の議論の場をつくり、市民の意見を踏まえるべき」と喝破されたことは画期的でした。

しかし、翌1月24日の同委員会は原発推進派の奈良林直・北海道大学教授を招致し「チェルノブイリの事故被害よりもCO2による温暖化の犠牲の方が大きい。ウクライナでは年に300mSvまでは被害はない。マスコミが国民を放射能恐怖集団ヒステリーにしてい

る」等の目茶苦茶な話をしました。

県民の命がかかっている重大な問題について、県議会や県知事は、専門家の意見を聞いてどう判断し、どういう態度をとるのか、大きな責任があります。私達はさらに県民的な議論にし、判断を県民自身にゆだねることを求めています。

●反プルサーマルの日“12・2” みんなで歩いた玄海町

12月2日、玄海原発で日本初のプルサーマル営業運転が開始された日。この日に毎年集会を行ってきましたが、今年は前日の「NO NOKUES えひめ集会」から一緒に東京、大阪の仲間達とともに、玄海町をみんなで個別訪問、玄海町長・九州電力・佐賀県知事への申し入れを行いました。

個別訪問では「原発あったほうがいい。豊かな生活ができない」「帰れ！」「電気が足りているなら、動かさなくてほしい」「原発いらないと言える身分ではない」「地元で声あげられないから、みなさんにやってもらえてありがたい」などのナマの声を聞かせていただきました。（初めて玄海町を歩いた参加者の感想を後述しています。）

玄海町長に対して「規制庁は県議会で『絶対に安全な状態は永久に来ない』と言ったが、自治体は住民を放射能から絶対に守るべき。再稼働を認めず、全国に先駆けて原発ゼロのまちへ」と要請。要請文に織り込



12月13日、佐賀県議会原子力特別委員会招致を終えた井野博満先生と懇談



12月2日、玄海町・浜野浦の棚田にて

んだ町民の声を読み上げる石丸代表の声には、住民の気持ちがのりうつり、涙ながらの訴えとなりました。私達は12・2を忘れません。今年の12・2も玄海に集まりましょう！

●ばかばかしさに早く気づいてほしい！ 原子力防災訓練見学

11月30日、「原子力防災訓練」が佐賀県、玄海町、唐津市、伊万里市で行われ、見学してきました。

前年は玄海町からの避難先となる南東方向の小城市へ向けて玄海から風が吹いていましたが、風向きで避難する方向を「混乱するから」という理由で変えず、今年もスケジュール通りに訓練を行っていました。原発から3キロ弱にある定員100名の特別養護老人施設は、車イスを積める福祉車両2台だけで前年は避難訓練を行っていましたが、今回は搬送が困難だとし「屋内退避訓練」を行いました。そのまま見殺しにされてしまうのでしょうか。

30キロ圏の伊万里市は初めて住民避難訓練を行いました。大型バス避難はさながら弁当付日帰り旅行

のような緊張感のなさでした。

いざ本当に事故が起きた時には、複合災害、道路渋滞等で何の役にも立たないであろう避難訓練。住民の命を守る重大な責任のある自治体には、そのばかばかしさに早く気づいてほしいです。

玄海町の小学生と住民は避難先の小城市の公民館で弁当を食べた後、「放射能の基礎知識」という講演を聞かされました。講師は原子力安全基盤機構の役人。「放射線は身近にある。こわくない。100ベクレル以下なら食べても大丈夫。隣のおじさん達の言うことは聞かないで、私達のような正しい情報をしっかり聞くように」。むごたらしい洗脳、再稼働への地ならしでした。

●福島の人々をバカにするな！ 避難計画で古川知事に抗議

12月3日に佐賀県知事あてに「原子力防災・避難計画」について質問書を提出しました。12月27日付で知事回答は<1 福島の実現を無視 2 曖昧な回答でばかす 3 国の施策の説明だけで、県としてどう対処するのかまったくない>というひどいものでした。

特に原発から30キロ圏外の避難計画に関する質問への回答は「飯館村などにおいては、1か月の間に避難をすることが求められた。…こうしたことから、UPZの範囲外において避難が必要になる場合は、一定の時間的余裕があることが想定されるため…避難計画の策定までは必要ない」とありました。もし玄海原発で何かあった時も、私達も1ヶ月も2ヶ月も何も知らされず、黙って被曝させられとけということか！

あまりに酷い回答だったため、怒りをこめて1月17日に抗議・再質問を行いました。

野中宏樹・100年の会共同世話人は2011年4月21日に飯館村を訪問した時のガイガーカウンターが振り切れる写真を見せながら「これが現実だ。30キロ圏内の避難計画は必要ないとは、いったい何を根拠にしているのか！」と問うと、担当者は「国の指針やさまざまな情報をもとに…」「ご意見は承りました…」と。

佐賀県の原子力防災を担う彼らは、県民を守るためにいったいどんな情報を集めたのでしょうか。私たちが示した飯館村の状況(ネットなどにより簡単に手に入るものばかり)は何ひとつ把握していませんでした。

再稼働云々の前に、県民の誰もが納得でき、被曝から守られる完全な避難計画をつくるのが先です。そして、何よりも、出発点として福島の実現を、ありのままに知るべきです。

●「みんなでがんばる…」無責任な規制庁 地震動と避難計画で規制庁交渉

1月29日、地震動過小評価・武村式問題と避難計画について、原子力規制庁交渉と国会院内集會が行われ、市民のみなさんと全国の原発立地地域のみなさんが集まり、裁判の会からも参加してきました。

「日本の過去の地震データを反映しない」再稼働基

11月18日以降の活動経過

■ 11月

- 17 裁判ニュース第11号発行
- 18 佐賀県議会原子力特別委員会(規制庁招致)傍聴
- 21 座談会(福岡)
- 30 原子力防災訓練見学

■ 12月

- 1 NO NUKES えひめ集会
- 2 反プルサーマルの日みんなで歩く玄海町
玄海町長要請、九州電力要請
- 3 佐賀県知事要請
- 4 「原発情報秘密だらけ」ストップ!秘密保護法全国集会
- 8 原子力市民委員会意見を聴く会・福岡
- 13 佐賀県議会原子力特別委員会(井野博満氏招致)傍聴
- 15 ストップ川内集会、全交・西日本集会
- 21 事務局会議、大掃除、望年会

■ 1月

- 4 エネルギー基本計画パブコメ宣伝(福岡)
- 11 事務局会議
- 17 佐賀県知事へ避難計画で抗議質問
- 22 宗像『2プル』座談会
- 24 佐賀地裁公判
- 25 飯塚座談会
- 28 再稼働阻止佐賀ネットワーク会合
- 29 規制庁交渉
- 31 会計監査

■ 2月

- 1 事務局会議「原発と地震」事務局学習会
- 2 鳥栖『2プル』座談会
- 16 さようなら原発九州総決起集会参加
- 17 座談会(福岡)
- 19 メーカー訴訟報告会・福岡
- 22 福岡グループを玄海町案内
- 23 セヴァン講演会・出展

準と「まったく実態に即さない」避難計画に、市民の怒りが炸裂しました。

【地震動過小評価を見直せ！】

地震動評価には2つの計算式、入倉式と武村式がありますが、日本のすべての原発の地震動評価は、同じ震源の地震であっても、津波評価は「武村式」、地震評価は「入倉式」で行われています。地震動も武村式で評価すると「4.7倍」もの大きさになります。

なぜか。入倉式は世界の地震のデータを基にしている一方で、武村式は日本の地震のデータを基にしていることが、市民の調査でわかりました。武村式は地域特性を反映していると考えられます。このことを認識していながら、電力会社に対して評価の見直しをするように迫らない規制庁に対して、強く要求しました。

この問題は玄海原発行政訴訟の大きな論点の1つであり、運動と裁判とがまさに車の両輪となっています。

【避難計画問題】

市民「重大事故が起きたら20分でメルトダウン始まる。住民の避難は間に合わない。どうするつもりか？」
規制庁「みんなでがんばってやる」

市民「台風や豪雪で道路は寸断され、身動きがとれなくなる。避難計画が具体的には何も決まっていないではないか。再稼働は絶対認められない。」

規制庁「再稼働と避難計画は別物。再稼働と関係なく、時間かけて一步一步つくなっていく、息の長い取り組みだ。」

国が関与する避難計画は何も具体化していないことが判明しました。

また、古川・佐賀県知事の飯舘村に関する発言も取り上げさせてもらいましたが、規制庁は「30キロ圏外の避難計画が必要あるかないか」ということでは、ま

だ判断材料がない」とのことでした。古川知事が「避難計画をつくる必要はない」と言い切ったことは誤りであり、これを再度追及したいと思います。

国は国民の命を守りません。地震動再評価問題、避難計画問題ともに、より身近な自治体から突き上げていきましょう！

●あなたも種まく人に！
座談会から

最近の座談会での石丸代表のお話。

「私は裁判所での意見陳述の前日、東京電力本社に電話しました。その時の東京電力の対応の酷さは、今思い出しても、ムカムカします。

福島原発事故の加害者である罪悪感などさらさらなく、逆に福島でもない人が何を聞きたいんですかと言わんばかり。

私は言いました。

『私は九州の人間だけど福島の現状は他人事ではない。だから、怒りでいっぱいです。しかし、福島の人にはそんなもんじゃありませんよ。怒り通り越して疲れ果てて声も出せないでいるんですよ、わかりますか。』

私は福島の人にかわって今怒鳴っているんです。責任は誰一人とってないじゃないですか。』

意見陳述の時は、前日にそんな事があったので、余計に怒りが込み上げてわーわーと声あげて泣きたいくらいでしたが、涙を必死にこらえました。

あなたも、わからないこと、おかしいと思うことがあったら、まずは電話してみてください。そして、そのことを友達に伝えてください！種をまく人になってください！』



11月30日、佐賀県原子力防災訓練
左、唐津赤十字病院 右、小城市に避難した玄海町子ども達



↑1月29日、規制庁交渉。「昨年9月、原発銀座の福井県を台風18号が襲い、道路が寸断された。複合災害への対処が何もないじゃないか」と地図を示して訴える福井の仲間。



1月17日、佐賀県知事へ抗議・質問



12月2日、玄海町長へ要請

↑12月4日、反原発「秘密保護法反対」全国集会&国会前行動。福島原発事故では、命に関わる情報が「秘密」にされ、被曝を強いられた。原発情報は黒塗りだらけ。秘密法で文書が存在さえも隠されかねない。秘密保護法を廃止しよう！

第1回「2プル座談会」

宗像市地区の〈風ふくおかの会〉とともに

裁判の会副代表 荒川 謙一

1月22日水曜日の昼から、〈玄海原発裁判の会〉と宗像市地区の〈風ふくおかの会〉で、『2プル座談会』を開きました。これを英語で言いますと nipple-symposium になりますが、シンポジウムとは、聞き手があって発表を行うものを指すようで、対して、日本の座談会とは？何人かが集まって、ある問題について、あまり形式ばらないようにしながら、各自の意見や感想を述べ合う会とのことでした。

【経過】

これまで、代表である石丸初美さんが個人的に言い出して、例え2、3人でもいいですよと、「原発、玄海のこと、裁判のこと知りたい」という人々に「伝える・話しかけ」会をやってきました。その結果、確かな効果を肌で感じ、できる限り足を運び続けてきたものがこれまでの「座談会」でした。

昨年も12月2日、このプルサーマルが始まった“命日”に起こす佐賀行動を県外にも伝えたいところ、再稼働が直近に迫っていると囁かれている中、東京や大阪や愛媛からも決起する人々が玄海町に集まって一緒に行動しながら、輪になって話す会も持てました。そこで、2013.12.2を再びスタートとして、2014年は、佐賀県を軸に近県各地で原点に戻って「座談会」という方法で最低月一回、根っこで思いの共有を感じる「会・サークル」と座を囲むことから、理解を深め繋がりを強めていきたいと企画することにしたのです。

【命名】

「密接に繋がっていくための座談会」が『2プル座談会』です。2009年12月2日、玄海原発で日本初プルサーマルが九電によって始められてしまった日、そして再び絶対止めると誓った日、「2」のつく日に「反プラトニウム」を学ぶ「2プル」は、語呂合わせです。さらに、原発の中に存在する数知れない配管や配線は、地震に襲われればそこで働く方々の命を支えているパイプと言っても過言ではありません。激しい揺れや圧力に耐えるように決して外れる切れることのないよう配管や配線を連結させている器具、これらをニップル配管というようです。それで、ニップル座談会です。

【今回のサークル紹介】〈風ふくおかの会〉

宗像市を中心に、原発やエネルギー、子ども達の未来について考え、行動している市民グループです。2011.3.11 原発震災以降に集まり、4月9日に結成しました。私たち一人一人は微力だが無力ではない、より良く変える力があるはず、これがこの会のコンセプト。「自分たちのエネルギーをムダにしないことを真剣に考えてみよう！」そんな情報発信・自由参加型の実践ネットワークとしています。正会員数36名（男8名／女28名 宗像市・福津市・古賀市・糟屋郡新宮町）／代表・荒川謙一（宗像市）

【この日の座談会あらまし】

玄海原発裁判の会より石丸初美・永野浩二・荒川謙一を含め、参加者計15名。

参加者は、長机に椅子ですが円座に囲み、席は自由。今日の主旨と進行のあいさつ、自己紹介など（一人平均3分間）。

裁判の会のタイム

〈映像スライドショー（石丸・永野）〉

- ①「玄海町の段々畑」
- ②「町の高台から4基の原発を臨む」
- ③「作業員宿泊の旅館は盛況、道路はラッシュ（駐車場は満杯）」
- ④「あらかじめ行動が予定されている避難訓練」
- ⑤「原発に付き物の〈秘密〉のひとつ」＝黒塗り資料
- ⑥「九電 vs 規制委員会の審査様子」
- ⑦「佐賀県議会、再稼働審査に関する専門家意見聴取⇒井野教授」
- ⑧「ドキュメンタリー映画『飯館村』と土井敏邦監督
- ⑨「裁判の会の人たちの玄海町訪問」…町の人に会うこと、1歩ずつから。

みんなでフリートーク

原発・エネルギー、被災地対策、平和に関する主な時事ニュース（12月26日～1月21日までの朝日新聞一面・社説見出しから）を取り上げました。

- 話題①「原発避難計画、自治体策定40%未済の状況、立地30キロ圏」
- 話題②「有楽町火災、新幹線止まる32万人に影響、出火パチンコUNO漏電」
- 話題③「三菱マテリアル四日市工場、爆発事故、熱交換器の解体作業中、5人死亡と12人重傷」
- 話題④「脱原発候補の1本化見送り、宇都宮・細川両陣営会談、実現せず」

【開催地側（風ふくおかの会スタッフ）からの感想】

- 石丸さん達が見聞きしてきた玄海町の風景・生の声を聴けてとても勉強になった。
- 本当は脱原発と思っている、町の発展とその恩恵



2月2日鳥栖『2プル』座談会

を享受してれば、それを隣近所で口にはできない様子は、かつて戦争に突入した時に「負けるのでは?」「早く止めるべき」とか、自由に口にすれば「非国民」差別を受けたのと、本質的に変わらない。

●沖縄の基地問題も同じ、国策だからとお金経済の力で人の心を踏みとじる、危険だけを押し付けてくることは、醜いし、国民主権ではない。

●福島事故を見れば、子どもたちのため「もう、いらない」とここにいて自分なら言いたいが、地元玄海町がそんな態度を表明できるにはどうしたらいいのだろうか? 外部から本当の情報を届けてくれる存在は、有りがたい人も居ることが分かった。

●多くの抵抗があり、「おかしな人たちの集まり」ではというイメージを持たれつつ、伝える大変さを知りながら、地元へ働きかけ続けてきた行動に感謝の気持ち

が湧いてきました。

●玄海原発に何かあれば、宗像も決して安全ではないと、周囲の人へ伝えていくことはできると思った。

初めての【2 プル座談会むなかた】は、とってもリラックスした雰囲気の中で楽しく真剣な時間を佐賀と宗像地区で共有できたなあと思います。意見の交換も建設的なやりとりが交差して、予定があり参加時間に制限のあった方も一度退室してからまた戻ってきてくれるといった場面もあったように、幼稚園バスのお迎えでお先に失礼! のママさん達もホントに後ろ髪を引かれる様なやり取りがされていました。予定した時間を一時間オーバーして最後まで熱弁をして下さった皆さん、また、ぜひお会いし話を花を咲かせましょう!

『12・2 反プルサーマルの日みんなで歩く玄海町』に参加して

『12・2 反プルサーマルの日 みんなで歩く玄海町』各地から参加されたみなさんの感想です。

◆大久保淳一 (鳥栖市/関東から移住)

玄海町を廻って感じたことは、これってとても大切なことだということです。これとは、玄海町の一軒一軒に伺ってお話を聞くことです。

私は、きっと門前払いされるのが関の山と思っていました。しかし、いざインターフォンを押してみると町民の方のしゃべることしゃべること。長い方で30分程お話された方もいました。

内容は、予想に反して反原発の意見が多かったのですが、原発肯定の方も含めて皆さんが原発に関して心に深く思うところがあることがよく分かりました。やはり、考えているだけではだめですね。行動せねば。

次回も参加したいと思います。

◆宇野田陽子 (大阪府豊中市/ノーニュークスアジアフォーラム)

昨年秋に玄海町を訪れた際に、原発エネルギーパー

ク(PRセンター)には立ち寄ったのですが、町の様子はあまりわかりませんでした。なので12月の戸別訪問に参加できて、何人かの方々とお話をすることができ、非常に考えさせられました。

「先代からずっとお世話になっているので、不安はあるが反対とは言えない」

「事故の時は山のほうに逃げろと言われているが、詳しくは避難場所も経路もわからない」

というようなお話が出ていました。若い女性の方が、とても丁寧に應對してくださったのが印象に残っています。

一番驚いたのは、玄海原発からすぐ近い場所にある特別養護老人ホームです。こんな近くにあって、どうやって避難するのだろうか。寝たきりの入所者さんは何人くらいいるのだろうか。若い介護者さんたちは、事故が発生したら自分や家族の身を守ることと、利用者さんを守ること、何をどう選ぶのだろうか。どんな車両をどこから何台だれが運転してきて、何十人もの寝たきりの入所者を移動させる計画なのだろうか。非常電源は何時間持つのだろうか。温度管理はどうなるだ



12月2日 玄海町で全国の仲間と交流会



玄海エネルギーパークにて、九電社長に対する要請

ろうか。そんなことをずっと考えていました。

私はいちおう医療職のはしくれなので、どうしてもそういうことが気になってしまいます。たった3年前に起きたことなのに、福島の高齢者施設や病院で起きた生々しい事実がほとんど伝えられていないのではないのでしょうか。原発で過酷事故が起きたら、周辺にいる高齢者や障がい者や病気の人たちがどんな状況に追い込まれるのか。私たちはそれに対してどう備えることができるのか、東北で起きた事実を知り、みんなで本気になって考えなければならないと痛感しました。

貴重な機会を与えてくださった地元の皆さん、ありがとうございました。

◆堀田千栄子(東京/原子力規制を監視する市民会/フクロウ FoE チャンネル)

日本初のプルサーマル発電が九州電力玄海原子力発電所でおこなわれた日を忘れない。

12月2日に玄海町を初めて訪ね、各地から集まった皆さんと歩きました!

今回は、個別訪問よりも初めての玄海町を堪能した感じもありますが、地元の方とお話することもできましたし、全国各地の皆さんとも出会うことができ、本当に行ってよかったと思っています。そして、また、機会を作って継続して訪ね歩きたいとも思っています。

私は、原発をなくし、今のような「いのち」や「人々の日々の営み」を犠牲にして「お金」を最優先に考える社会、思いやりを忘れ「競争」し「格差」を生み出す社会を変え、そうした社会を次の世代に渡していきたい、という思いが根っこにあります。原発をなくせば終わることではありません。だからこそ原発をすぐにでもなくして、その先にみんなの力を向け、進みたい。

私ひとりでは一気に大きく何かを変えることはできませんが、多くの人がつながりながら変えることはできると思っています。

今回、何軒か訪ねた中で、玄関口に招いてくれて話をしてくださった方が「昔、自分が小さかった頃、この家の前に道路はなくてすぐ浜辺だった。夕食のお魚を家の前で獲ったりしたんだよ。この町はとても豊かだった」と話をしてくださりました。

また、「原発災害の避難訓練などあるようだけど、福島事故をみれば『避難』なんてものでは済まない、自宅周辺に入ることもできず、いつ帰ることができるかもわからないのに、『避難』なんていわないよ」とも。

一体いつから「豊かさ」を、お金や溢れる物の多さで計るようになってしまったのでしょうか。原発もそういう社会が生み出したものの一つでもあると思います。

私の故郷は、東北・宮城県角田市の南の端っこ、ちょっと走ればすぐ福島県という、小さな山の麓の小さな集落です。我が家の脇にある小さな山道を走れば、峠道の先がぱっと開けて、目の前に南北に広がる平野とすぐその向こうに太平洋が広がります。

2011年3月11日の地震の後、津波が押し寄せ、

平野を横切る自動車専用道路まで、本当にすべてが流されました。私の従妹夫婦も友人の家族も、多くの方が津波で亡くなりました。私の家族も、あちこちの避難所を回り従妹夫婦の行方を探し、やがて、遺体が収容されている体育館などを探すととなり、3月半ばと3月の終わりに、二人の遺体を別々の収容先でなんとか見つけることができました。

しかし、その時すでに、すぐ隣の福島で、原発事故が起こっていました。

陸にも海にも県境などありません。福島の浜通りにも大きな大きな津波が押し寄せ、おそらくたくさんの方が津波の犠牲となったのでしょう。

しかし、原発事故により大量にばらまかれた放射能のため、津波に巻き込まれた故郷の町で、行方不明の家族や知人を探すこともできなかったのです。

私の母は、仲の良かった従妹夫婦を亡くし悔やんだり泣いたり辛そうでしたが、それでも、あの年の5月、こう言いました。

「(私らは) それでも遺体を見つけることができ、対面できて、良かった…。福島の人たちは本当に気の毒。原発事故のせいで、ご遺体を探しに行くこともできない。自分たちの住んでいたところに入ることもできない。戻る見込みも立たないなんて…。」

原発さえなければ。

それは私だけではなく、多くの方が感じたことではないでしょうか。

大事ないのち、慎ましくも家族とともに培ってきた大事な暮らし、そういったものを一瞬にして失い、また取り戻す気力まで奪ってしまう、原発事故。そして、政府や行政、事故を起こした企業群の対応。

3年が過ぎようとしている今でも、福島事故の被害にあいいろいろなものを破壊されてしまった人たちの暮らしは、それぞれの立場で、何も解決していません。

原発はとてとても不自然で、悲しみや分断や差別を生み出すものの一つです。

みんなの力で、原発を止め、原発のようなものに依存しなくても大丈夫な社会を、お互いを思いやりながらみんなが豊かで幸せに暮らせる社会を、取戻したり築いたりしていきたい。それはできる!と信じて行動していきます。



12月16日、川内原発のフェンスにて。向原祥隆さん(右端)らの温排水調査に同行

伊方と川内へ～集会に参加し、原発を見てきました

裁判の会会員 塩山 正孝

伊方原発

11月30日の夜、小倉港から出港したフェリーは松山港に翌朝5時に到着。2台の車で下船した私達6人は、まだ夜が明けない中を西の方角へ向かって走り続けました。

8時半過ぎた頃、瀬戸内海へ近づいて行くと、段々と下り坂になり、急な七曲りの坂道を下り終わったところに、原発が2基冷たい顔をして立ち並んでいる姿が目に入りました。

この一本道を下りきった先にある検問所の処まで行ったところで、数人の警備員達がにわかに警戒し始めました。私達はUターンして見晴らしの良い場所に車を止め外に出ました。目の前に瀬戸内海が広がっていて、遠くで数隻の船が浮かんでいました。後ろを振り返り山の上を見上げると、数基の風力発電が羽を動かしていました。ゲートの方に目をやると、出勤の車が次から次へとその狭い坂道を下ってやって来て、検問所を通過して敷地内へと入って行きました。

こんな急な斜面の真下に、しかも狭い一本道の先端にあんな危険な原発が立っているということは、万が一大地震や津波などが発生し、崖崩れなどで事故が起きてしまったら、そこで働いている作業者の人達の避難は勿論、原発のコントロールさえも不可能になってしまうことを意味するものなのでしょう。

ここ伊方でも、原発が建設されようとした時、懸命に反対運動をしていた方達がおられたとのことですが、最後には常套手段で他の町と同じ結果になったわけです。

暫く辺りの様子を見て、「NO NUKES えひめ集会」会場の松山城へと戻って行きました。雨が降り出しそんな中、会場では沢山の人達で賑わっていました。全国各地から色とりどりの旗がなびく中、ステージでは山本太郎氏と三宅洋平氏がテンポ良くトークをしていました。

そして遂に雨が降り出したので、いくつも張ってあるテントの下に体を半分突っ込みながら、宇宙飛行士の秋山さんや広瀬隆さん達のスピーチを聞きました。

降り続く雨の中、原発を何が何でも止めるんですけど、あの力強い言葉に、自分達が今やっている運動は間違っていないだと改めて強い決意が湧いて来ました。

集会後、お城の周りを全員でデモ行進。私達も「伊方原発再稼働反対! 玄海原発再稼働反対」と声をあげてきました。

デモの後は、支える会会長の澤山保太郎さんや、東京から参加された「ふくろうの会」の阪上武さん達、大阪から参加されたノーニュークスアジアフォーラムの佐藤大介さん達が、私達の翌日に計画していた「12・2みんなで歩く玄海町」に参加しようと、帰りのフェリーと一緒に乗り込んで、その夜はとても楽しい海上の交流会となりました。

川内原発

12月15日、鹿児島県川内市の「ストップ川内原発再稼働集会」が行われる広場に佐賀から4人で到着。組み立てたのぼり旗を抱えながらチラシを配っていた時、鹿児島のある大学で教鞭を取っている男の人に会いました。色々話し合い、最後に「再稼働を止めるのに、何か特効薬はありませんかね?」と尋ねられ困ってしまいました。佐賀から一緒に来た石丸陽一さんが「そんなものないでしょう」。男の人、「……」。全くそのとおりです。自分達が今できることをじゃんじゃんやればいいんだと思います。

集会では福島から来ていた女性の方が心の底から怒りを表しておられた今の日本の状況に、再び同じ怒りを胸に抱かずにはいられませんでした。

翌朝、反原発・鹿児島ネットの向原祥隆さん達が長年実施しておられるという川内原発付近一帯の海水の温度測定に我々も同行することにしました。11ヶ所をその日の内に終わらせるといういつものスケジュールに、大変辛抱強い調査をやっておられるのだと非常に頭が下がる思いでした。

途中、原発の放出口に接した広い立派な砂浜に立ち寄りました。手前には管理がなされていないような荒



伊方原発



原発さよなら四国ネットワークの看板前にて



12月1日、えひめ集会にて、同ネットワークの大野恭子さん(左端)と再会。山本太郎さん(真中)とも再会!

れた松原があり、その中ほどにある空きスペースに車を止め、そこから砂浜まで歩いて行きました。原発敷地の金網フェンスの上の監視カメラが私達の動きを追いかけているようでした。砂浜に出ると3基の原発がやはり異様な姿をして立っているのが目に入りました。

そこから放出された温排水はその隣にある砂浜の海に直接流れ出ていました。放出される直前にいくつものシャワー装置があり、シャワーの状態になった水がそれによって普通の海水と変わりのないような状態になっ出てくる仕組みになっていました。原発がなければ美しい砂浜で海水浴や釣り客で賑わう処でしょう。

そこにはウミガメが何も知らずに毎年産卵に上がっ

て来るそうです。本当に悲しい限りです。自然を破壊している私達人間は、こういう状況を真剣に認識しなければいけません。

この後、すぐ近くにあるビクターズ・センター（玄海町のエネルギー・パークの川内版）を訪問しましたが、我々玄海の建物が如何に大きくて豪華にできているかと非常に驚いた次第です。

その後、まだ残りの測定箇所を車で移動し、夕方いっぱいにと終了することができました。鹿児島でもみんなの自然を守るために毎日地味な努力をしておられることをこの目で見て知り、感謝の気持ちに抱かすにはいられませんでした。

2013年度決算報告書

【一般会計】

2013年1月1日～2013年12月31日

	科目	2013年度決算	通 要
収 入 の 部	原告団会費収入	3,210,500	
	支える会費収入	1,069,804	
	サポート会費収入	151,000	
	仮処分・会費収入	15,000	
	寄付金収入	1,079,293	
	その他収入	356,052	本、缶バッジなど物販、普通預金受取利息
	機関紙売上金	23,400	「そいぎ」売上げ
	前期繰越金	1,491,537	
	合計(A)	7,396,586	
支 出 の 部	旅費交通費	2,104,869	弁護団・世話人など旅費交通費
	活動費	300,000	専従活動費
	通信費	134,496	インターネット通信、電話、携帯電話
	運賃郵送費	421,310	宅配便、メール便、切手、はがき
	交際接待費	11,149	食事代、菓子代
	会議費	12,550	会議、講演会など室使用料
	水道光熱費	69,183	電気、灯油、カセットガスボンベ
	消耗品費	268,854	広報チラシ用紙、印刷代など
	租税公課	1,867,400	提訴時印紙・道路使用申請時証紙代など
	支払報酬	150,000	弁護士・講師謝礼
	新聞図書費	62,418	参考図書・新聞・パンフレットなど
	諸会費	16,000	原子力情報室、自治会費など
	寄付金		
	賃借料	767,740	家賃、駐車場代、iスクエアロッカー使用料
	機関紙作成費		
雑費	9,970	ゴミ袋、お茶代、振込・交換手数料など	
	合計(B)	6,195,939	
	次期繰越金(A-B)	1,200,647	

【特別会計】


特別積立金(定期預金)	2,000,000	裁判終了後の報告集製作費
貯金利息	838	利息1,050円、税金212円
次期繰越金	2,000,838	

監査報告

2013年度の決算報告書を監査した結果、総勘定元帳・仕訳帳・証券など正確に記帳されており、何ら不正不当のないことを確認しました。

2014年1月31日
会計監査 横井 久





**原子力防災は
廃炉しかない!**

発行「プルトリウムなんていらんよ!東京」制作 高木章次

再稼働しないのが
実施可能な
避難計画に
作れないの
稼働しないの
再稼働しないの
再稼働しないの

オを描き、それが現在審査中です。

この重大事故シナリオで、住民の避難はいつから開始するのか等について、1月29日の政府交渉で質問し、文書でも再質問したところ、2月5日付で規制庁から回答がありました。回答からは、到底避難などできないことが明らかです。

●PAZ (5km 圏内) の住民は、事故発生と同時に「避難の準備」、炉心溶融開始前 = 事故発生から約 20 分後に「避難の実施中」となります。実際には、準備も実施も不可能です!

●UPZ (30km 圏内) の住民は、炉心溶融が始まっても、まだ「避難の準備」。放射線量が1時間あたり 500 μ Sv (0.5mSv) になってはじめて、「数時間内に区域を特定し、避難を実施」。要支援者や避難道路が使えない地区の住民は「一時屋内退避」となっていますが、いつ避難できるかも分かりません!

コラム ー今、この時から…

荒川 謙一

私がこの原稿を起こしている今この時、福岡県糸島市では、市長と市議の同時選挙運動が最後の局面を迎えております。伊都、志摩は、皆さまご存知のとおり、歴史ある地であり日本でも海に夕陽が沈む風景は、人々にいつでも絶賛の感動を与えてきた有数の地であります。そこで、ムダな大型開発の連続に「もう黙っておれん」と立ち上がった糸島市民の会のK市長候補と100年先まで社会までを考える「どんぐり政治」を訴えるF市議候補の脱原発・福祉の充実・市民の生活を守る政策に対して、「市民の声は聴く必要が無い」かのようなこれまでの市政を受け継ぐ保守T市長候補は、発展は経済ありき開発だ、合理化が必須、役場の支所はインターネットの時代には必要ないので廃止など、福祉福祉の連呼ではこの市は破綻に追い込まれる、市民は惑わされてはいけないとまで街宣していました。このままでは弱者がより我慢を強いられる状況になりそうですが…。(市民はどう選んだのでしょうか?本誌が届き、読んでいただいている今、すでに判明しているのですが…)

九州と同じくらいの面積を持つ人口約550万北欧の農業国デンマークでは、お年寄りは無料でバスや電車に乗れ、基本的には保健・福祉・医療・教育は無料化されている。義務教育から大学教育まで学ぶ意思がある者には100%税金で賄われ、大学での生活費交通費でさえ返す必要のない奨学金を受け取れる制度が実施されています。政治への関心度は高く投票率90%以上です。しかし33年前、かつて北海油田開発前、エネルギー自給率5%と資源に恵まれなかったこの国では、原発の推進の是非が問われたことがありました。3年をかけて国民主導による推進賛成意見も反対廃案意見も50:50の討論を深めた検討によって「未来に子どもたちに危険を押し付けられない」と原発計画廃止を決定しました。チェルノブイリ原発事故起こる1年前1985年のことでした。そしてそれから、国土に合った「風力発電」を主軸として発展させながら、「コージェネ(熱電併給)」や「バイオマス」によって、エネルギーを確保してきたのです。

どうして今の日本では、お金・経済発展が、自然より命より最優先なのでしょう?いつから、経済成長がなければ私たちは豊かにはなれないと思うようになったのでしょうか?経済発展だけでなく、戦争と平和、安全保障、日本国憲法、環境危機、原発とエネルギー危機、健康と医療、民主主義など、それぞれの問題に対する「常識」と言われる考え方が、本当のところは現実離れしたものであり、真剣に未来を考えるなら、私たちが実際に直面している現状に合った考え方を常識にする必要があると思うのです。山林や海や農地の開発に明け暮れ、巨大ビルディングや巨大テーマパークや地下鉄・高速道路網を一体いつまで作り続けられるのでしょうか?これこそ非常識だと思えます。

脱原発の物理学者「藤田佑幸」さんは、講演会の最後にスライドショーにて京都のお寺にある古の言葉の碑「吾唯足知」を大きく映します。そして、知足の思想「足りることを知る」という、自然との調和を訴えて結ばれますが、「人間は、電気を欲するままに垂れ流して贅沢の極みを尽くすため、遊ぶことを目的に働き、生きていくのではない」と教えられます。「昨日のように今日があり、今日のように明日がある」という私たちが持続可能な循環型社会を作るためには、変わっていくチャンスをいくら待っていてもやって来ません、流行言葉ではありませんが、いっしょに変える行動するのは今、この時からでしょう!今しかないと思うのです、原発は知れば知るほど本当に要りません!

お知らせ

忘れないで3.11 佐賀 2014 守れますか あなたの故郷

土井敏邦監督 新作ドキュメンタリー映画
『飯館村 放射能と帰村』上映会 & リレートーク

3.11 東京電力福島第一原発事故から丸3年。

福島の人たちは、今なお、見えない放射能におびえながら暮らしています。

人間として生まれ、自然の恵みに囲まれて成長し、子どもを生み育て、日々の暮らしを繰り返してきた私たち。そんな、当たり前前の生活を奪う原発事故。

3.11 この日に、福島の実況、苦悩や悔しさをじっくり感じてみませんか。そして、子や孫たちの未来のために、今できること、一緒に考えませんか。あなたは守れますか、あなたのふるさと、佐賀を。



- 日時：3月9日（日）
13時開場 13時半開演
- 場所：メートプラザ佐賀 多目的ホール
佐賀市兵庫北 3-8-40 TEL 0952-33-0033
- 資料代 500円
- 連絡先：090-6772-1137（石丸）
090-5740-1441（杉野）
- 主催：忘れないで3.11 佐賀実行委員会

座談会しませんか？

手作りの「怒」の横断幕。お蔵入りしていたのですが、最近、またよく掲げています。「今、怒らないでいつ怒る？」の思いからです。

中には「“怒”を前面に出していいんでしょうか…？敬遠する人もいませんか？」と聞いてくる人も。

何ゆえの「怒」か？「怒」の裏に何があるのか？その答えは座談会で！

1人からでも、グループでも、玄海現地の動きを写真・映像で見ただきながら、ぜひ語り合しましょう！
どこへでも行きますので、事務局までご連絡ください。



【編集後記】

■上京の際、都知事選の脱原発候補の応援に行った。事務所は赤ちゃんから年配の方まで市民でごった返していた。ネットでは候補者の肉声や脱原発仲間の行動がリアルタイムで伝わってきた。マスコミは伝ええないが、名もなき市民一人一人が願いをこめて、必死に行動していた。編集を終えた今日、家の前の梅の花が咲きだしている。某候補の吹雪の中の最終演説を思い出す。“真理は寒梅の如し 敢えて風雪を冒し花開く”。春は近い！（永野浩二）

公判のお知らせ

公判の予定が先々まで決まりました。玄海プルサーマル MOX 裁判は年内に結審の予定です。行政訴訟も始まりました。ぜひ傍聴をお願いします。

3月13日（木）
■13時30分～MOX 第3回弁論準備手続（非公開）

4月18日（金）
13時30分～行政訴訟第2回公判
14時～ 全基第8回公判
14時30分～仮処分第12回審尋
15時～ MOX 弁論準備（証人申請など確認）

5月30日（金）
14～15時 MOX 証人申請

7月18日（金）
10～16時 MOX 証人尋問

9月19日（金）
14時～ MOX 最終準備書面陳述、結審

裁判のヤマ場です！
ぜひぜひ傍聴を！

※場所はいずれも佐賀地方裁判所です。
※時間は予定です。
※傍聴を希望される方、事前にご連絡ください。

あなたのチカラが必要です！

★ボランティア募集！
★カラー機関紙『そいぎ』発行しました。
1部100円です。広めてください！

最新情報や日々の活動を
ホームページ <http://saga-genkai.jimdo.com/>
フェイスブック <http://www.facebook.com/genkai.genpatsu>
にアップしています。ぜひご覧ください。

会員募集中！

■原告会員は年会費1万円。支える会会員は5,000円。
サポート会員は一口1,000円より。
■振込先：郵便振替口座 01790 - 3 - 136810
玄海原発プルサーマル裁判を支える会

会員数 (2014.2.23 現在) 原告(被告・九電=MOX、仮処分、全基) 399名
原告(被告・国=行政訴訟) 384名
支える会・サポート会員 787名

■最近よくため息をつく、高3の長女。受験だからじゃなくて、卒業が寂しいからだそう。友人はもちろん、先生のこと大好き。部活では初心者ながら水泳部に所属、なんとか経験者に並ぶまで記録を伸ばした。修学旅行に運動会。かけがえのないときを経て、明日からの大学入試に臨む。思えば3年前のあの日は、彼女の中学校の卒業式だった。以来、今日まで充実した時間を過ごせたことを感謝せずにはいられない。原発事故で被災された方々は、それぞれにどんな3年だったろう。（大江登美子）